

いのちを守るための避難訓練。しかし、そのマンネリ化や当事者意識の育成などの課題が聞かれます。地震を始めとした災害への対策は時代とともにアップデートされ、状況によっては正解が一つとは限りません。災害、とりわけ地震大国の日本においては無縁の地域はないからこそ、訓練において知っておくべきポイント、そしてどのような備えが有効が考えます。

1 地震が発生したとき、命を守るセオリーは

東京学芸大学 渡邊正樹特任教授

- (1)教室以外での地震発生を想定した避難訓練を工夫する。
- (2)地震発生時には停電になることを想定しておく。
- (3)校舎の外へ避難することが安全とは限らない。
- (4)地震以外の災害が同時に発生した避難経路・避難場所を選択できるようにしておく。

2 避難訓練の形骸化・マンネリ化をどう防ぐ

宮城教育大学 林田由那講師

- (1)東日本大震災以降、全国の避難訓練は、実践的なものになっている。
- (2)避難訓練の臨場感・緊張感は、教員が作り出すもの。その雰囲気子どもを巻き込む。
- (3)みんなで避難訓練をつくっていく。(子ども、保護者・地域住民)

3 イレギュラーにどう対応するか

高知県土佐市 吉門 直子教育長

- (1)災害発生時には常にイレギュラーへの対応がもとめられる。
- (2)想定をはるかに超える事象に的確に対応できるよう、職員は真剣な検討を重ねる。
- (3)教職員として「考え・行動する」日々の当たり前を高めていく。

4 自分事として受け止められるか

諏訪 清二 防災教育学会長

- (1)「災害を自分事に」という価値の存在だけをお教える教育では不十分。
- (2)価値に子ども自身が気づき、納得できるような教育が必要。
- (3)防災の知識や技能を一方的に与えるのではなく、子どもが自ら課題を設定しその解決に向けて協働的に学ぶ。



先月の熊本地震を受けて、「余震はいつ起きてもおかしくない」という前提で、今できることを職員全員で行うことが大切です。文部科学省も、学校の地震対策として、建物本体だけでなく、家具・棚・照明器具・天井材などの「非構造部材」による被害を防ぐことの重要性を示しています。

特に学校では、「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」環境づくりが基本です。

地震そのものを止めることはできません。しかし、地震で物が落ちる、倒れる、動くことによるけがは、私たちの今日の行動で減らすことができます。

余震への備えは、特別なことではありません。子どもたちが毎日過ごす場所を、もう一度自分たちの目と手で安全にすることです。『落ちてこない・倒れてこない・移動してこない』木上小学校を、職員全員でつくっていきましょう。」

木上小学校で職員と確認したい 5 つの指導ポイント

1 「高い所に重い物を置かない」

Points: 重い物は下へ、軽い物でも固定を。

- ・ 棚の上に段ボールや教材、ファイルを積み上げない
- ・ 高い棚の最上段には、重い物を置かない
- ・ 地球儀、楽器、作品、賞状額なども落下しないか確認する
- ・ ロッカーや書棚の上を「とりあえず置く場所」にしない

地震では、棚の上の物が凶器になることがあります。まずは「頭の上に何があるか」という視点で見直すことが重要です。消防庁も、家具の転倒防止とともに、重い物を低い場所に置くことを基本的な対策として示しています。

2 「棚・ロッカー・家具は必ず固定する」

Points: 置いてあるだけでは、安全ではない。

- ・ 背の高い書棚やロッカーが壁に確実に固定されているか
- ・ 固定金具やベルトに緩みや破損がないか
- ・ 複数の棚を重ねている場合は、上下が固定されているか
- ・ キャスター付きの家具は、ストッパーが確実に機能するか
- ・ ピアノなど重量物の固定状態も確認する

学校施設では、書棚や可動式収納などが地震時に転倒・落下しないようにすることが重要とされています。

3 「子どもの逃げ道を絶対にふさがない」

Points: 揺れた後も、すぐに逃げられる教室に。

- ・ 出入口の周囲に棚や机、荷物を置かない
- ・ 廊下や階段に不要な物を置かない
- ・ 倒れた家具が出口をふさぐ配置になっていないか確認する
- ・ 窓際や避難経路に大型家具を置かない
- ・ 普段から「ここに物が倒れたらどうなるか」を想像する

家具は倒れるだけでなく、揺れによって滑ったり移動したりすることがあります。出口や通路を塞がない配置が重要です。

4 「落ちる物をなくす」

Points: 子どもの頭の上をゼロ危険に。

特に次の場所を職員の目で重点的に確認します。

- ・ 照明器具
- ・ 天井や天井から吊り下げている物
- ・ 掲示物や額縁
- ・ 時計
- ・ テレビ・電子黒板・モニター
- ・ プロジェクター
- ・ エアコン周辺
- ・ 体育館の器具や吊り下げ設備

「今まで落ちたことがないから大丈夫」ではなく、「強く揺れたら落ちないか」という視点で確認することが必要です。文部科学省は、天井材、照明器具、体育器具などの落下や、家具・重量物の転倒による人的被害への対策を求めています。

5 「職員全員で“危険を見つける目”をそろえる」

Points:自分の教室だけでなく、学校全体を守る。

一人で点検するのではなく、職員で校舎内を歩きながら、

- ① 落ちてこないか
- ② 倒れてこないか
- ③ 移動してこないか
- ④ 逃げ道をふさがないか
- ⑤ 子どものいる場所に危険がないか

という 5 つの視点で確認すると分かりやすいと思います。

例えば、「自分が 1 年生の子どもになったつもりで教室を見ると、職員にも具体的な視点が生まれます。文部科学省も、学校施設について日常的な点検と必要な耐震対策を進めることの重要性を示しています。

学校にいる時に大地震が発生したら？ 先生が知っておくべき“学校地震対応マニュアル”

先生(教職員)がとるべき行動

揺れの最中：短い声かけで行動をそろえる。(揺れている間に長い説明はできません。「机の下！」「頭を守って！」といった短い声かけで、クラス全員の行動をそろえることが最優先です。先生自身も頭を守りながら、子どもの様子が見える位置で確認します。先生が落ち着いているかどうかは、そのままクラス全体の落ち着きに直結します。)

揺れた後：けが人・経路・放送の確認(揺れが収まったら、けが人の有無、ガラスや照明の落下、廊下・階段の通行可否、校内放送や管理職からの指示を確認したうえで避難に移ります。避難経路の安全確認は教職員が先に行い、階段では特に速度を落として声をかけながら誘導します。文部科学省は、各学校に危機管理マニュアル(学校防災マニュアル)の作成と見直しを求めており、地震を想定した避難の手順や教職員の役割分担は、本来このマニュアルに沿って学校ごとに定められています。自校のマニュアルを年度初めに確認しておくことが、当日の判断を軽くします。)